



●水は高さから低きに……

「滝と噴水」に興味を抱くようになったのは、40年以上前のことです。ジュネーブのレマン湖畔にある、130 m 以上打ち上げている当時世界の噴水に初めて出会ったときに抱いた、素朴な感じから始まります。すごい噴水だと感じつつも、日本人の感覚とはどこか違うと感じたのです。「すごい」とは思ったのですが、決して「安らぎ」の得られる風景ではなかったのです。日本人は、こんなことをしようという発想は持たないだろうと、正直思いました。水は自然の重力に従って、高さから低きに流れるものです。それが自然の法則であり、自然に従った水の流れである滝を眺めるほうが、私ども日本人は安らぎを感じられると思ったのです。そのとき、もしかしたら日本人と西欧人の心のあり方の根底を流れているものの違いなのかもしれない、という思いが筆者の中に生まれたのです。

その後、典型的な日本庭園には噴水はなく、西欧の庭園には古い時代から噴水が圧倒的に目立っていることに気づきました。旧GCPが新GCPに変わる頃、つまり1990年代の後半に入り、国際協調の流れの中で

西欧流の治験の実施のし方がもろに日本に入ってきた際に、その普及啓発の役割を担うことになった者の一人として、日本人と西欧人の心の根底を流れているものに違いがあるのであれば、十分に認識した上で対策を考えることが大切なのではないか、という思いが強くなってきたのです。そこで、日本庭園の滝と西欧庭園の噴水のスライドを作って、欧米の文化を直訳的に表層的に輸入するのではなく、本質を日本人の心にマッチしたものに消化吸収して導入することの重要性を語る際に、しばしばこのスライドを使用しました。

スヌーピーのグッズはたくさん日本に輸入されていますが、米国の新聞に掲載されていたチャールズ・M・シュルツの描く4コマ漫画の心は日本に入ってきたように思っていたので、同じ文脈で捉えていたのだと思います。今回は触れる余裕はありませんが、スヌーピーの出てくる「ビーナッツ」という漫画は、実は「米国の良心」のようなもので、米国内でよく見られる人間模様について、いくらなんでもこれはおかしいのではないかと風刺的に描いて国民の笑いを誘っていた、とても真面目なメッセージ性のある作品なのです。しかし、その真面目な部分がわが国にはほとんど伝えられておらず、「スヌーピーのかわいらしさ」といった表面的なものだけが国内に広がっているのがとても気になっていたのです。

●日本文化と欧米文化の表現形の違い

この「滝の日本文化」と「噴水の西欧文化」の対比の話は、国内でも賛同して下さる方が多かったのですが、新GCPが国内で完全実施になった1998年にボストンで開催された米国のDIAのシンポジウムで、日本の医学者の考えを語るようにと招待を受けました。米国の治験事情を見学させていただく約束を取り付けた上で、参加しました。欧米人と日本人

の心や文化の違いを少しでも理解していただくよい機会だと思ったので、スライドを使って滝の文化と噴水の文化の話もしました。驚いたことに、米国での反響はわが国内よりも大きく、チェアマンを含む多くの出席者から「面白かった。滝と噴水の話は、いままで考えたこともなかった」と握手攻めにありました。同じ年の夏、ロンドンで同じような話をする機会があり、このときも同様な反応でした。ロンドンでは講演会後の懇親会の席で、参加者の方々に聞いてみました。

「なぜあなた方は、滝より噴水が好きなのですか？」

例によって、ガヤガヤと議論をしていましたが、結論は、「どうもわれわれは、自然に逆らっても自然をコントロールすることに価値を見出しているのだろう」ということでした。この答えは、実は予想していたとおりで、本当に知りたかったのは次の質問の答えでした。

「あなた方は、滝と噴水のどちらを見ていると気持ちが安らぐのですか？」

またしてもガヤガヤと議論をした後の結論は、「滝の方が気持ちは安らぐ！」でした。この答えをもらって、とても嬉しい気分になりました。つまり、滝を好むか、噴水を好むか、は表現形の違いとして現れているだけで、人間の心の深いレベルでの反応は「自然の重力の法則に従う滝のほうが気持ちが安らぐ！」という点で、日本人も欧米人も同じだと確認できたからです。

●「バランスよく補い合う」ということ

日本の庭園には噴水が少ないのですが、後楽園(岡山)、偕楽園(水戸)と並んで日本三名園の一つに数えられている兼六園(金沢)に噴水があります。日本で最古の噴水ですが、江戸から明治に時代が移ろうとする頃(1861年)に、前田斉泰が金沢城内に作

らせたものだそうです。隣の池の水面の高さまで水の高さが上るような仕組みになっており、自然の法則を利用したものであって、モーターなどの動力は使われていません。したがって、西欧の噴水のように自然をコントロールしようとしたものではありません。最近の欧米の噴水は、高さを競うだけでなく、ライトアップしたり、音楽に合わせて動きを演出するようになってきていることも多く、心安らぐためというよりも、楽しめるものが増えています。

先日、毎年恒例となっている山形での医療コミュニケーションのワークショップを開催した際のことです。山形に最近、西欧並みの高い噴水ができたことに興味を抱いている、と筆者が語ったことを覚えてくださった知人の案内で、「月山湖(がっさんこ)大噴水」を観る機会に恵まれました。日本には珍しい大噴水で、山形県西川町の国道112号線沿いにあります。1時間おきに10分間ですが、噴水を打ち上げており、112mの高さまで上がります。ここに寒河江(さがえ)ダムを建設するにあたり、112戸が移転を余儀なくされ、土地と家屋が湖底に沈んだこともあってか、月山湖では「112」という数字にこだわっていました。寒河江ダムの竣工式の日時は、11月2日11時20分だったとのことでした。日本的なこだわりを維持しつつも、日本文化が西欧化しつつあることの証でもあります。

自然の流れに従うか、自然をコントロールしようとするか、どちらを重視するかは、そこに生活している人達の心のあり方、つまり文化により異なります。風土も大きく影響しています。私どもの医療の中では、疾病を理解しコントロールしようとする現代西洋医学と、人間に本来備わった自然治癒力を生かそうとする「養生法」があります。その片方に偏るのではなく、バランスよく補い合うと、患者にとってよい医療になるのではないのでしょうか。

なかの・しげゆき 岡山大学医学部 卒。大分医科大学臨床薬理学教授、同附属病院臨床薬理センター長、大分大学医学部附属病院長、大分大学学長補佐などを歴任。大分大学名誉教授。大分大学医学部創薬育薬医学教授、国際医療福祉大学大学院教授を経て現職。日本臨床薬理学会名誉会員(元理事長)、日本臨床精神神経薬理学会名誉会員(元会長)、日本学術会議連携委員、日本心身医学会認定医・指導医、日本臨床薬理学会専門医・指導医、日本内科学会認定医、CRC 連絡協議会代表世話人。響き合いネットワーク連絡協議会理事長として、医療コミュニケーションを学ぶ全国的なワークショップ(大分、岡山、東京、長崎、山形、湯布院)の企画・運営に携わっている。
http://www.med.oita-u.ac.jp/pharmaceutical_medicine/index.html

